ISSN 1341-4844

広島県立歴史博物館

研究紀要

第24号

今中丹後「御中老格控」からみる広島藩重職の書状贈答料紙 ‥‥ 石川良枝 1

闘茶について―闘茶札と文献資料から探るその具体像― ‥‥‥‥‥‥ 石橋健太郎 24

資料紹介―塩竈神社奉納額について― ‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 伊藤大輔 51

「菅茶山」の姓名・号について―茶山・晋師・太中― ‥‥‥‥‥‥‥‥ 岡野将士 59

吉川興経の引退と毛利元春の家督相続 ‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 木村信幸 67

研究ノート　文化年間初頭に地方に伝わった北方図について～「松前えそ図」と
「従尾張国至蝦夷北極出地度量図」を事例に～ ‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 久下実 85

「山陽先生詩稿」訳注（一） ‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 花本哲志 99

広島県立歴史博物館所蔵の雲華上人の書簡―翻刻と解題―
‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 湯谷祐三　廣森美枝子 121

福山市津之郷町出土の廃和光寺塔址出土遺物について ‥‥‥‥‥‥ 尾崎光伸 (1)

令和3年

ISSN 1341-4844

BULLETIN
Of
the HIROSHIMA PREFECTURAL MUSEUM of HISTORY

Vol.24

2021

Artifacts Excavated from the Ruins of the Abandoned Wako-ji Temple Pagoda in Tsunogo-cho, Fukuyama City ····· OZAKI Mitsunobu (1)

Mapping papers used in formal correspondence, traced from Onchūrōkaku-hikae ····· ISHIKAWA Yoshie 1

"Toucha" —Search of the concrete image to begin with a tea competition cards— ····· ISHIBASHI Kentarou 24

About "SIOGAMA shrine exvoto" ····· ITOU Daisuke 51

About the name of "KAN Chazan" and pen name—Chazan Tokinori and Tachu— ····· OKONO Masashi 59

About the inheritance of Kikkawa family by "MOURI Motoharu" and the retirement of "KIKKAWA Okitsune" ····· KIMURA Nobuyuki 67

Two maps of HOKKAIDO spread to local area in Japan in early BUNKA-period (approximately 1804-1808) ····· KUGE Minoru 85

Sanyou-Sensei-Si-Kou;translation and annotation;part1 ····· HANAMOTO Satoshi 99

The letters of Priest Unge in the collection of the Hiroshima Prefectural Museum of History ····· YUTANI Yuuzou, HIROMORI Mieko 121

研究ノート　文化年間初頭に地方に伝わった北方図について
～「松前えそ図」と「従尾張国至蝦夷北極出地度量図」を事例に～

久下　実

はじめに

令和元年十月、質量ともに国内最大級の古地図を中心とした個人コレクションである「守屋壽コレクション」が広島県立歴史博物館に寄贈された。同コレクションは、平成二十六年に同館に寄託されて以降、二十八年度、三十年度と追加で寄託があり、当館では寄託を記念して企画展をそれぞれ開催し、多くの来館者があった。

このコレクションには、松浦静山旧蔵の「日本輿地図」（「享保の日本図」、平成二十六年寄託）、正保二年の「万国総図」の対幅（平成二十八年寄託）、「日本扶桑国之図」（平成三十年寄託）など、寄託を受ける度に、新たな発見が注目を集めた希有なコレクションである。

そして、本稿でその中から、いわゆる「文化元年東日本伊能小図」の写本である「従尾張国至蝦夷北極出地度量図」を取り上げる。本資料は平成三十年に寄託されたものの一つで、同年四月に同館で記者発表を行い、続いて企画展「初公開！　世界を驚かせた日本人の地図づくり」で初公開されたものである。

また、本稿では、当館が所蔵する重要文化財「菅茶山関係資料」にも同時期の蝦夷地（北海道）の地図である「松前えそ図」も取り上げる。

これら二点の地図資料は、来歴などは全く異なるものの、内容を比較するといくつかの共通点がある。そこで、両資料の特徴を明らかにした上で、具体的に比較検討を試みたい。

本稿の目的は、次の三点である。まずは、菅茶山関係資料所収の「松前えそ図」についての再評価である。この資料については、過去に当館での展示会で何度か紹介(1)されており、平成二十五年に拙稿「黄葉夕陽文庫「松前えそ図」について」で詳細に報告している。しかし、その後、拙稿に対する反論を受けて、再検討した結果、修正を行った部分もあり、その点について報告する。

次に、守屋壽コレクション所収の「従尾張国至蝦夷北極出地度量図」について、その特徴を改めて確認し、伊能忠敬の実働期における伊能図の伝播について、事例を紹介することである。これまでこのような伊能図の存在が知られていなかったこともあり、先行的な研究はほとんど見られないが、菅茶山関係資料の「松前えそ図」と比較することで、若干の考察を試みたい。

一　「松前えぞ図」について

（1）絵図の概要と来歴の再評価

本図は、重要文化財菅茶山関係資料のうち指定番号が絵図−40（**写真1・黄葉夕陽文庫F11−91**）である。なお、同資料群中に本図と同名の別の写本が存在する（**絵図−41〔F11−91−2〕**）が、注記などの情報量が本図の方が多く、別図には本図以上の情報がないことから、本稿では前者（絵図−40）の「松前えぞ図」のみを扱う。

前稿では、この図が近藤重蔵系の北方図であること、類例が北海道大学に所蔵され、文化年間の作成と評価されていることを紹介した。その一方で、本図には茶山の筆とみられる端裏書（**写真2**）があり「此図もと鯨取又左衛門へ公儀より被下候　又左衛門　えそへ鯨取に参候節之事と云」と記されることから、本図が寛政十二年（一八〇〇）の幕府による択捉の捕鯨調査と関わりがあると茶山が認識していたことに言及した。前稿において筆者は、これを含む本図の注記の情報は、茶山が原図を入手した際に同時に入手した情報と考えられると推測し、原図の提供者を茶山とも交流があった近藤重蔵と推測した。

この点について、その後、北方図の研究者高木崇世芝氏から、「松前えぞ図」にはノサップ岬が明確に描かれている点を根拠に、文化年間以降の図で、享和より早い段階には存在し得ない図である旨の御指摘を受けた。また、広島県立歴史博物館で菅茶山関係資料を担当している岡野将士主任学芸員からは、菅茶山の日記の文化五年（一八〇八）四月二十四日の記述に「仮谷東平蝦夷図」、同年六月八日には「東平来宿還蝦夷図」(2)とあり、この日記中の「蝦夷図」が本図に当たるのではないか、との御教示を受けた。ただし、「仮」には「借りる」と「貸す」の両方の意味があり、この場合どちらなのかというのは、日記の記述だけでは特定が難しい(3)。茶山が借りたのであれば、茶山は文化五年に「松前えぞ図」を入手したことになる。一方で茶山が東平に貸したのであれば、別の人物から入手したこととなるので、茶山は文化五年までに「松前えぞ図」を入手していたことになるため、別の経路で入手したことになる。いずれにしても、「松前えぞ図」を谷東平と菅茶山との間で貸借していた可能性は十分にあると考えられる。なお、谷東平については次節で述べたい。

ところで、この図の端裏書の、択捉での捕鯨調査に関わる地図という記述内容については、高木氏の御指摘の年代観と矛盾をするが、記述内容の真偽はともかくとして、少なくとも茶山がそのように認識していた（この蝦夷図をそのように認識した者がいて、茶山にその情報を伝えた）と考えられることは、押さえておきたい。あわせて、これまで本図の類例として北海道大学に所蔵されている「蝦夷新図」の年代について先行研究では文化年間とされている(4)が、遅くとも文化五年の四月段階にこの系統の地図が地方に伝播していることを考慮に入れれば、遅くとも文化三〜四年頃までには成立していたと考えられる点も指摘しておきたい。

さて、ここで、択捉島付近で行われた捕鯨調査について、概略を紹介しておく。幕府は、南下政策を進めるロシアに対応するため、蝦夷地など北方の防備を充実させる必要に迫られていた。一方で、寛政年間以降、この地を調査し、北海道の東部や北方四島近海に鯨が棲息しているのを確認した幕府は、捕鯨の漁師たちをこの地に定住させた上で有事には防備に当たらせる、いわば屯田兵のような役割を担わせられないか、検討した。そのための現地調査が行われたのが先述の寛政十二年で、この時、当時九州で盛んだった捕鯨の中心的な存在

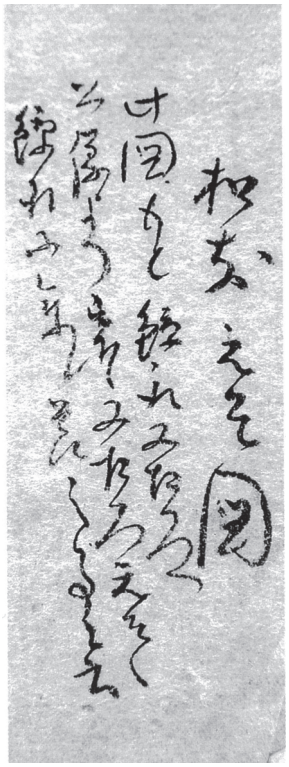

写真2　「松前えそ図」の端裏書

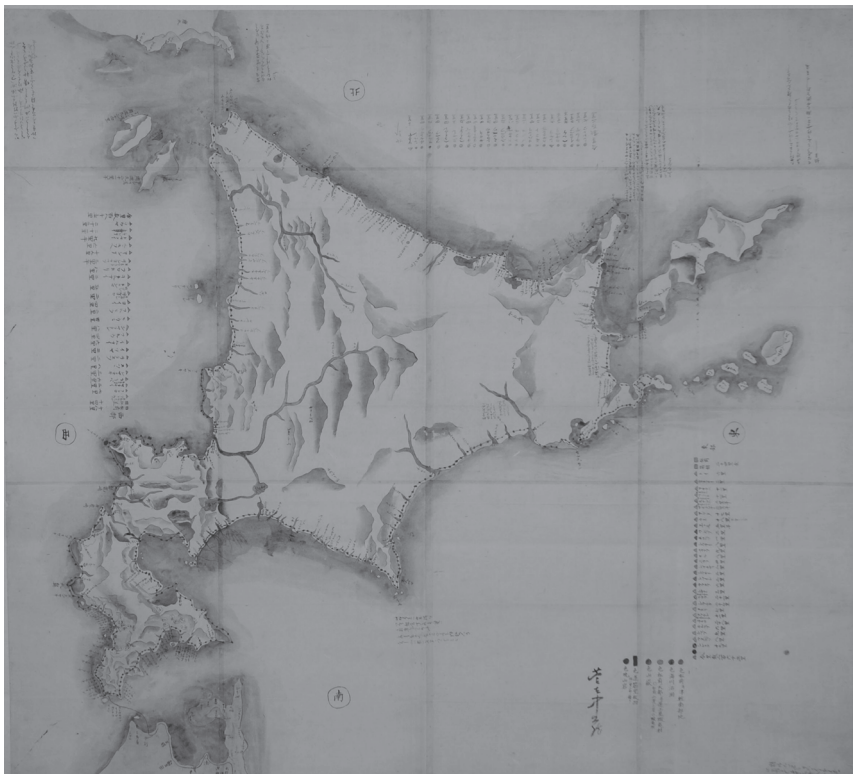

写真1　「松前えそ図」（重要文化財菅茶山関係資料　絵図-40）

写真3
「文化改正　拾遺日本北地全図」（守屋壽コレクション　当館蔵）

であった平戸藩生月島の捕鯨集団の指導者益富又左衛門が、幕府の役人達とともに現地の見分を行った。結果は、捕鯨集団の生活が成り立つほどのものにはならないとの判断が下され、捕鯨集団の移住計画は頓挫した。

翻って「松前蝦夷図」の端裏書には淡々とした事実のみが書かれるが、それはただ平戸の鯨漁師が北の果てに見分に赴いたという「物珍しい話」というのではなく、この背景にはロシアの南下に対する幕府の危機意識があった、ということを菅茶山も理解した上でこの地図や蝦夷地に関心を寄せていたことは想像に難くない。

ところで、現代に暮らす私たちにが「松前えそ図」を見た時、多くの人が無意識のうちに北海道の地図であることを認識するだろう。しかし、文化年間当時において、蝦夷地（北海道本島）の外形がこのような形であるとの認識を持っていた人はごくわずかであったと考えられる。実際のところ蝦夷地や江戸からも遠く離れた西国の福山藩領に、このような外形の「蝦夷地」の地図がもたらされたのは、この図が初例であった可能性すらある。

実際に、十九世紀初頭の段階では、北海道本島の図形について、幕府などの蝦夷地政策に関わるごく一部の関係者を除いて（やや大げさに言えば）世界中のほとんど誰も知り得なかった情報であったと推測される。ちなみに松前藩が十八世紀末に作成した地図は、茶山の蝦夷図とほぼ同時期の文化年間に印刷され商業出版されたが（**写真3**）、一見して分かる通り形は扁平で方角の精度は高くない。その後も、同様の扁平な北海道本島の図形は様々な形で流布しており、これが市井に流布していた「蝦夷地」の外形のイメージであった。いくら菅茶山が全国各地の学者とのネットワークを持っているとはいえ、地方に暮らす一介の藩儒の下に「松前えそ図」のような当時最新の測量図が所蔵されていたことについては、もっと注目されてよいように思われる(5)。

そのような文脈で「松前えそ図」を捉えた時、茶山が写本を二鋪作成していたことは、茶山自身、本図を重視していたことの表われとも解釈ができるのではなかろうか(6)。

(2) 谷東平について

ところで、茶山と「蝦夷図」を貸借したと推測される谷東平とはどのような人物なのだろうか。彼は、安永三年（一七七四）生まれの備中の測量家で、上方や江戸で測量、算術を修めたことが知られている。上方では麻田剛立らに師事していた。その後、江戸で伊能忠敬に天文学や測量を学んだという。伊能測量隊が備中を測量調査に訪れた際、東平も一緒に測量を行ったというが、それも自然な流れであっただろう。

そして、文化年間の初め頃には帰郷していたようだ。算術や測量の著作も遺しており、郷里で塾を主宰し後進を育てた。独自に備中国の測量図も製作したと言われる。文政七年（一八二四）に五〇歳でその生涯を終えた。

茶山との関わりを見ると、彼の日記にはしばしば谷東平の名前が見え、継続的に交流があったことが窺える。現在確認できる中では、茶山の日記に最初に登場するのが文化三年（一八〇六）七月二十五日で「谷東平恵東国名勝図」、同九年（一八一二）二月十六日には「東平来借天書数事」、同十年（一八一三）三月二十四日には「東平来還備後図」とある。東平は「蝦夷図」のほかにも茶山に地図資料や天文書を提供したり、貸し借りしたりしていたことが分かる。ちなみに、東平の号「以燕（もちすけ）」は茶山が名付けたものであった。

また、谷東平は、備後国箱田村の庄屋を務めた細川家ともつながりが深かっ

た。文化四年に伊能忠敬が福山に立ち寄った際に、同家子息が伊能忠敬の門下に入り（この人物は後に箱田良助を名乗る）、文化六年（一八〇九）に伊能忠敬の測量旅行の一員となるに当たって誓約書を提出したが、その後見人に、実父とともに谷東平が連署している(7)。

伊能忠敬に箱田良介を紹介したのは谷東平と推定され、伊能忠敬の谷東平に対する信頼の様子も推しはかることができる。

谷東平は、伊能忠敬とも親交があり、麻田剛立の門下でもあったので、江戸や上方で活動する中で、当時の著名な測量家たちとの交流を持っていたことは想像に難くない。そして、そのような中で谷東平は近藤重蔵系の「蝦夷図」を入手できる立場であったのかもしれない。

二　「従尾張国至蝦夷北極出地度量図」について

（1）資料の基本情報と来歴

本資料は、畳物の地図は展開すると不定形（**写真４ａ**）で、最大長二四四センチメートル、最大幅二〇六センチメートルを計る。

地図の端書には文化四年（一八〇七）五月二十三日から六月二日に「澣華井」が筆写した旨が記される。幹華井は、越後高田藩の中老を務めた鈴木甘井の号で、本図がこの人物によって写されたことが分かる。

本図が守屋壽コレクションに所収される以前のことは詳らかではないが、わずかに昭和十年代に、東京で公開されていたことが知られている(8)。

（2）「文化元年東日本小図」と筆写した人物

では、この鈴木甘井とはどのような人物であったのだろうか。『上越市史』と『高田市史』等によって概観したい。

この人物は越後高田藩の鈴木弥市右衛門で、延享元年（一七四四）に生まれている。田沼時代に藩の江戸詰の中老として、積極的な殖産興業策を講じ、藩の財政再建に貢献したとされる。しかしながら、寛政期以降、田沼時代の風潮が退けられる中で、反対勢力によって処分を受け隠居したという。

彼は、江戸詰時代から、茶道、有職故実、本草等の芸事・学問に秀でた好学の士として知られていた人物で、多くの文化人とも交流があったという。

とりわけ俳諧には秀でていたようで、高田藩の俳諧を牽引する存在であったようだ。「澣花井」（「澣華井」）は、基本的に俳句の号であったらしい。文化九年（一八一二）に亡くなるが、その直前に、自らの蔵書を藩に寄贈した。

現在、地元にも彼の著述や記録などはほとんど残されておらず、実像が不明な点が多い人物とされている。彼と伊能忠敬の交流の有無も不明であるが、伊能忠敬が測量のために越後高田に入ったのが享和元年（一八〇一）で、この時一行が宿泊した宿は、鈴木甘井の屋敷と比較的近い場所であった。あるいは面識があったかも知れないが、茶山と忠敬に見られる親交があったという事実を伝える史料は確認できない。

ちなみに、甘井が高田藩に寄贈した書物の多くは散逸しているようだが、一部現存し地元に伝わっている。その中には絵図類も数点あるものの、城の絵図や街道の絵図で、本図のような広域の地図は伝わっていない。

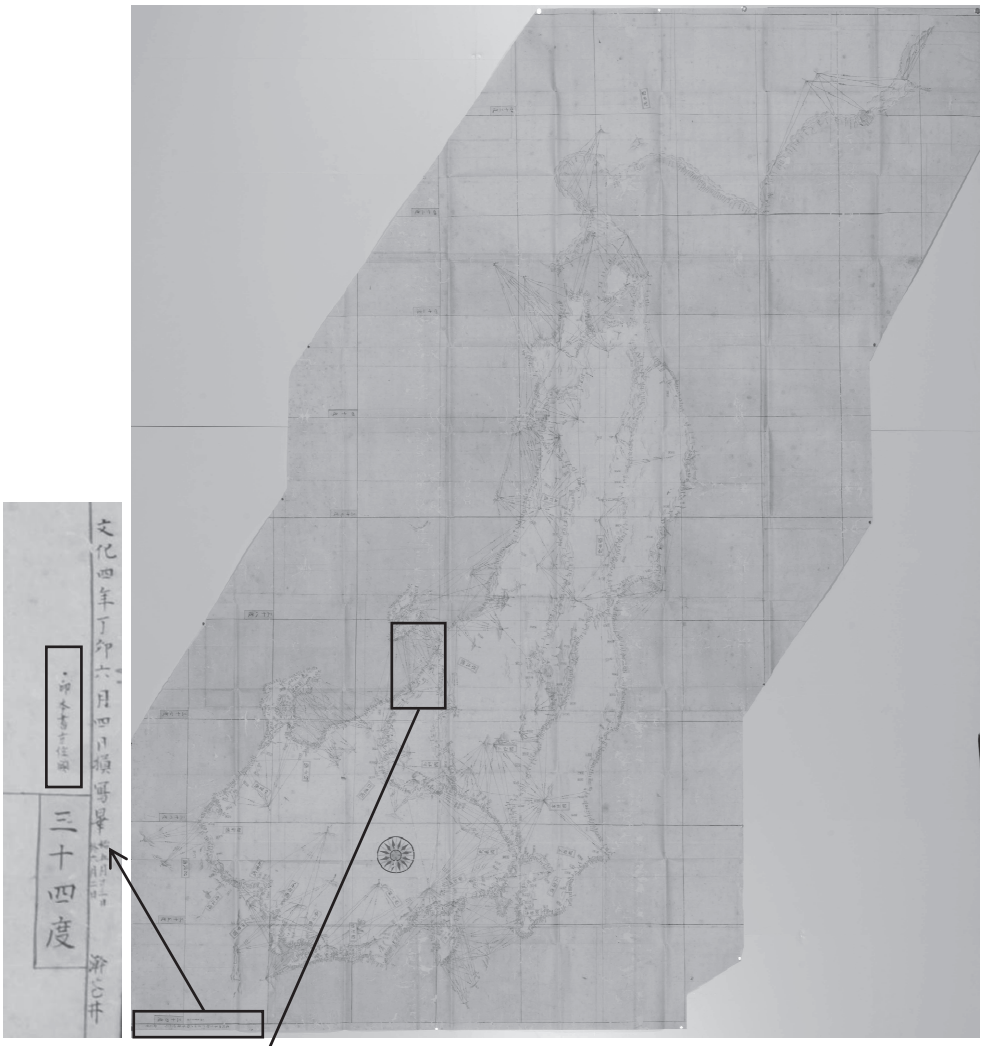

写真4b

写真4a　「従尾張国至蝦夷北極出地度量図」（守屋壽コレクション　当館蔵）

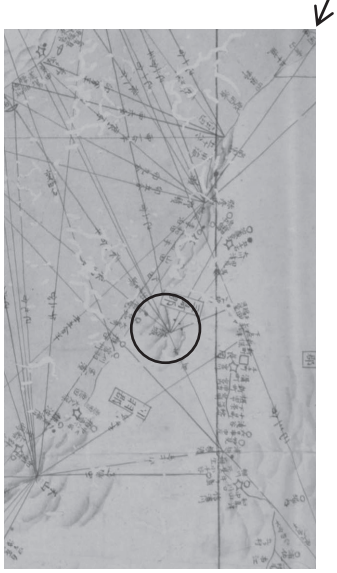

写真4c

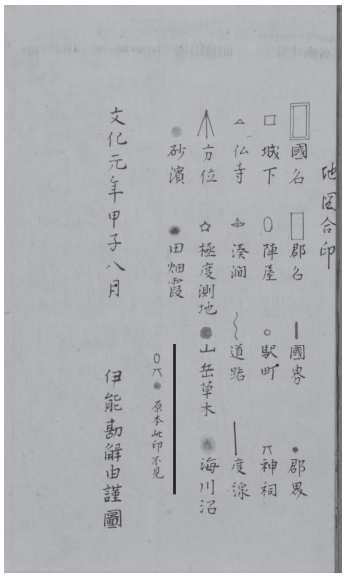

写真5b

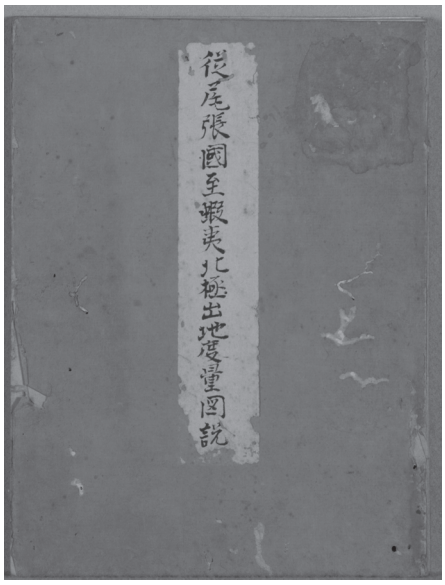

写真5a　「従尾張国至蝦夷北極出地度量図説」
（守屋壽コレクション　当館蔵）

	平面形	年代	所蔵先	備　考（《内題・外題等》）
1	不定形	文化元年(1804)頃	個人	伊能忠敬作成。伊能家に伝わった副本
2	長方形	同上	国文学研究資料館	伊能忠敬作成。旧津軽家伝来の副本
3	長方形	同上	国立国会図書館	伊能忠敬作成。 堀田摂津守（忠敬測量時の若年寄）旧蔵 《日本沿海分間図官撰東国完》
4	長方形	不明	神戸市立博物館	佐野常民旧蔵
5	長方形	不明	国立国会図書館	勘定奉行中川忠英旧蔵。文化４年に蝦夷地派遣。 《日本沿海分間図官撰東国完》
6	長方形	不明	名古屋市蓬左文庫	尾張藩士大道寺家用人水野正信筆写 《大日本沿海里程測量図》
7	長方形	嘉永元年(1848)	前田尊経閣文庫	加賀藩士藤井三郎が筆写
8	長方形	不明	早稲田大学図書館	旗本久須美家旧蔵
9	長方形	文政12年(1839)	古河歴史博物館	鷹見泉石関係資料（国重文）。鷹見泉石筆写
10	長方形	幕末期	長崎歴史文化博物館	峰源助筆写，安政期頃か
11	長方形	不明	那谷寺（石川県）	
12	長方形	不明	宮内庁書陵部	
13	長方形	不明	太皷谷稲荷神社（島根県）	1/2の縮図。
14	長方形	不明	国立公文書館	同上
15	不定形	文化４年(1807)	広島県立歴史博物館 守屋壽コレクション	越後高田藩の鈴木甘井筆写。 《従尾張国至蝦夷北極出地度量図》

※1-3 は焼失した原本に近い資料。4-12・15 はその他の写本。13・14 は縮小図。
鈴木純子「伊能図の内容と構成（『伊能図大全』河出出版）をもとに作成

表1　文化元年東日本伊能小図の類例一覧（縮小図を含む）

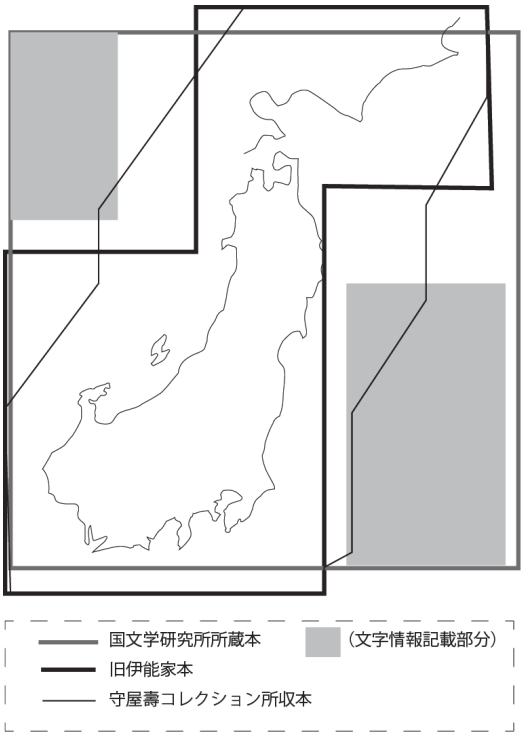

図1
文化元年東日本伊能小図の展開時の平面形比較

（3） 地図と本資料の特徴～類例との比較から～

本資料は、文化元年東日本小図と呼ばれる伊能図の写本である。文化元年東日本図は、伊能忠敬が、まだ幕府の直轄事業ではない第一次～四次調査の成果をまとめて地図化したもので、幕府に上呈され、高い評価を受けた。この結果伊能忠敬は全国の測量調査と地図製作が幕府に認められ、以後の調査と日本全図の作成を幕府の直轄事業として行うこととなった。文化元年東日本図は伊能忠敬にとっても文字通り画期的な成果であった。また、この伊能図には縮尺により、大図・中図・小図があったことが知られており、本資料はそのうちの小図で縮尺は三分一里（約四三二、〇〇〇分の一）である。

では、本資料について、資料名、形状、針孔、端書の四つの観点で、類例等と比較して、その特徴を確認する。なお、鈴木純子氏によれば、文化元年東日本小図の写本等の類例は、表①のとおりである。

① 資料名

本資料には表紙が付いており、そこには外題（従尾張国至蝦夷北極出地度量図）が記された題簽が貼られている。尾張国から蝦夷地に至る北極出地（＝緯度）の実測図、といった意味である。一方で表①に示した他の類例については、筆者が実見できておらず、内題や外題などを確認できていないが、「沿海地図」と表記されているものが多い。№2・4は「日本沿海分間図官撰東国完」とあり、文化元年の伊能図はこういった名称の図として知られていた。これらと比較しても、本資料の名称が独特であることが分かる。ただし、この点について、国宝伊能忠敬関係資料には、伊能忠敬が残した地図関係の資料に「従◇◇至△△北極出地度量図」という名称のものが一定数あり(9)、本資料のネーミングは、これらと同様であることから、伊能忠敬の地図らしいものと言えるかも知れない。

② 形状

本資料は、先述のように、表紙付きの畳物であるが、展開すると不定形のプランを呈する。一方で表①に示した現在知られている類例はほとんどが長方形のプランであり、不定形を呈するのは伊能家の控え図とみられる現在個人蔵の図（以下、「旧伊能家本」という）のみである（**図1**）。このことには注目をしておきたい(10)。

また、本資料には、識語・跋文・測量データ・凡例などの文字情報を収録した折本装の「従尾張国至蝦夷北極出地度量図説」が伴う。このことも本資料の大きな特色である。他の類例では、これらの文字情報は畾紙（地図の余白部分）に書かれている。ただ一点、旧伊能家本のみ、これらのデータが図中に記載されていない。この点でも、本資料の特徴と一致している(11)。

幕府に提出された東日本伊能小図は、その後焼失したため、実物が残っておらず、その形状は明らかでないが、例えば表①の№2・3は、伊能忠敬が製作したもので、幕府に提出した図の複製として作成したものと解釈されており、その他の類例がいずれも同様の特徴をもつ（長方形のプランで、畾紙に文字情報を伴うスタイル）ことも、これらがいずれもこの系統の写本と考えると説明が付く。これらを仮に「幕府上呈図系」と呼ぶことにする。一方で、本資料と旧伊能家本はこれまで見てきた特徴から「幕府上呈図系」とは異なる別の系統に分類できそうである。そこでこのグループを「伊能家本系」と仮に呼ぶこととする。

③ 針孔

伊能忠敬が作成した系統の地図を一般に「伊能図」と呼ぶが、これらは大ま

かに、伊能忠敬が作成した原本（下図を含む）、伊能忠敬が依頼を受けて作成した複製、第三者が筆写した写本に分類できる。

このうち、伊能忠敬が作成に関わった地図は、図中に作成時の痕跡として小さな針孔があることが明らかにされている(12)。一方、針孔のない伊能図の写本は、図の精緻さにおいて、伊能図が本来備えている細やかさを必ずしも反映できていないものと見なされている。

実際、本資料には針孔がない。旧伊能家本と本図の海岸線の描線を比較すると、本資料では海岸線など屈曲した描線が単純化されており、いわゆる甘い線となっている。

ところで、針孔のある伊能図の写本は、忠敬が作成に関わった可能性が高いことから、伊能図を研究・評価する上でこの針孔の有無が、写本としての資料を評価する際の重要な情報の一つと見なされてきたが、それを踏まえて本資料には「針孔がない」ことを特徴の一つとしてあげておきたい。

④　端書

先述の通り、本図には筆写した人物によるとみられる端書があり、「原本此印不見」と記されている（**写真４ｂ**）。

表①でも示したように、本資料は、年代が確定できる東日本伊能小図の写本のうち、現在確認されている最も古い事例である。伊能忠敬が原図を完成させたのが文化元年七月なので、わずか三年足らずで写されていたことが分かる。

また、本資料の図中および図説（別帖）に記載の凡例の部分には、筆写した際に鈴木甘井の補足とみられる小さな注記が確認できる。そこには「原本此印不見」という記載がある（**写真５ｂ**）。凡例に印がある以上、本来は図中に示されているべき記号が、鈴木甘井が入手した「原本」には、図中に見当たらないことを書き留めたものとみられる。この写本を閲覧する際の注意書きであると同時に「原本」の記載漏れを指摘した形にもなっている。

ところで、本資料と「旧伊能家本」が、題名や形状から、本図資料が他の「幕府上呈図系」とは異なる「伊能家本系」の系統に位置づけられる可能性についてはすでに触れたとおりだが、では、両者に何らかの関係性は見出せるのであろうか。甘井が「此印不見」とした箇所を「旧伊能家本」の図中の内容を確認すると、当然ながら、いずれもデータが漏れなく記され、凡例の記号は図中に全て使用されている。これは、甘井が入手した「原本」が、「旧伊能家本」でなかったこと、すなわち鈴木甘井筆写の伊能小図は、「旧伊能家本」の孫図（二次的な写本）またはその次以降の写本であったことを示す。

本図の存在が明らかになるまで「旧伊能家本」の系統の写本は確認されておらず、「旧伊能家本」が写されていたことも想定されていなかった。今後、このような事例が発見される可能性もあるかもしれないが、本図が初例であることを鑑みてもこのような写本は、ごくわずかしか作成されなかったと考えるべきかもしれない。甘井が入手した「原図」は希少なものであったと思われるが、その写本を、特に伊能忠敬と親密な交流があったとは考えられていない越後在住の知識人が筆写し所蔵していたという事実は、興味深い。

本図は、文化元年に伊能忠敬が作成した東日本伊能図の写本であるが、単に年代が確定する最も古い作例というだけでなく、これまで知られているうちで唯一の「旧伊能家本」の系統の写本と考えられる資料であることが明らかとなり、その点でも貴重である。

三　両図の比較検討を通して

ここまで、二つの北方図の概略と特徴を紹介してきた。そこで、この両者を比較検討し、とりわけ、両者の共通点を抽出することで、ここから読み取れる十九世紀初めにおける地図の地方への伝播について、若干の考察を試みる。

両図の共通点としてあげられるのが、ともに幕府系の北方図という点である。また、筆写年代が文化五年頃までと、時期が近いのも共通点と言えよう。そのほか、筆写・所蔵者が、地方に住む半ば在野の知識人であることや、両図とも針孔がない写本である点も共通点する。これらついて、順に検討していきたい。

まず、「松前えそ図」も「東日本伊能小図」も、元々の原図は民間や藩のレベルで作成したものではなく、幕府が製作に深く関与した地図である。「松前えそ図」は、寛政期から享和、文化初年頃に、幕府が、ロシアの南下政策への対応に迫られる中、蝦夷地の調査を実施し、沿岸測量を行って作成した地図の一つである。その意味で、茶山が裏書きした「蝦夷地での調査に使用した地図」、というのは、情報の真偽の検証は必要となるものの時代状況を鑑みれば一定の説得力はあると言える。

「東日本伊能小図」に描かれる蝦夷地は、寛政十二年の伊能忠敬の第一次調査で行った蝦夷地の太平洋側の地形のみであるが、伊能忠敬が蝦夷地の地形を測量したのも、幕府が蝦夷地経営という課題を抱えていたからこそであった。

また、このような作成の動機に幕府が関与している地図、且つ蝦夷地という当時ほとんど未知の土地の地図を、作成から数年以内という情報の「鮮度」が高い時期に外部に伝播していることは、とても興味深い。

次に、筆写の時期について注目したい。両図の筆写時期、すなわち文化四～五年といえば、文化二年三月に半年間の軟禁を経てレザノフに長崎からの退去を命じ、翌三年九月、四年五月にいわゆる文化露寇事件（フヴォストフ事件）が発生するなど、ロシアとの対立や沿岸防備などに関心が高まっていた時期であった。その時期に、精度の高い地図が、地方に流布し写本が作成・所蔵されていた事例が複数あることは、単なる偶然か、当時のあり様をある程度反映したものか、現段階では判断材料に欠けるが、このタイミングでの北方図の地方伝播には注目したい。

これまで見てきたとおり、伊能忠敬の門下生でもあった谷東平は、茶山と親交があり地図資料や天文書などを貸借していた。東平は、その経歴からも茶山の他にも文人や測量家と様々なコネクションを持っていたはずで、蝦夷地の地図を始め、貴重な地図を入手し筆写したのだろう。仮に「松前えそ図」を東平が入手し、茶山に貸したとすれば、東平がそのようなネットワークを持っていたことになる。一方の「東日本伊能小図」については、甘井が誰から入手したのか具体的な候補も見当たらないが、これまでの検討の中で、伊能忠敬に近く「旧伊能家本」を写すことができた人物を想定したい。

茶山も甘井も、藩や幕府など公的な手続きを経てこれらの北方図を入手したわけでなく、伊能忠敬など幕府の調査事業に関わった人物とつながりがある者を経由して入手したことが窺える点でも共通している。言わば知識人達の「ネットワーク」が機能して、通常なら所持するどころか閲覧することもできないような幕府系の地図が地方に伝播したということであろう(13)。

菅茶山は福山藩の藩儒であるが、非常勤であり、そもそもは在野の学者・教育者であった。鈴木甘井もかつては江戸詰の中老として、藩政の一翼を担って

いたが、寛政期以降、隠居を余儀なくされ城下で塾を主催するなど、藩府とは一定の距離を置いていたと考えられている。ともに地域を代表する知識人の一人であったが、彼らの下に幕府系の北方図が非公式なルートでもたらされ写本として伝存しているという点については、当時の知識人たちの対外関係に対する関心の高さを示す一例と捉えたい。

現段階では対露関係の事件などに関して、この二人の知識人が考えを示したような記録は確認できていないが、西洋の船が日本列島周辺に出没し始めるなど、変化しつつある時代状況の中で、北方や西洋諸国の動向などについて関心を高めていたと考えられる。

最後に、針孔がないという共通点について検討しておきたい。

地図を筆写するには、いくつか方法があることが知られている。針孔を穿って作成された複製では、図形はより正確に写し取られ、描線もシャープに描くことが可能である。その一方で、上から重ねての敷き写しや、左右に並べての模写であれば、図形や描線も正確さを欠き、地図としての精度は下がってしまう。

地図は、そもそもそこにある情報（描線や地名などの情報、凡例、彩色など）に価値が置かれるものであるので、例えば、針孔があるものは、原図をより正確に写し取られた図であると見なされる点で資料的な価値が高まるというのは、一般的にはその通りである。

しかしながら、今回取り上げた両図のように、文化人・知識人のネットワークの中で入手することができた（借りることができた）地図を借りた側が手元に置いておこうとすれば写本を作成する以外に方法はない。しかし、借用した図を汚さず傷めず返却する必要があるので針孔を開けてまで正確な写しを作ることはできず、多少の精度の低下はやむを得ないものとして敷き写しなど別の方法で図を写すのが当然と思われる。

今回取り上げた両図に関しては、針孔がない事や情報の欠落などについても、入手ルートを知る上での手がかりとなりうるものと言えるだろう。

おわりに

以上、ここまで、二つの北方図について検討をしてきた。「松前えそ図」については、茶山の図の入手ルート、筆写時期などについて修正を行ったが、このような地図資料が、文化五年段階で、西国街道の宿場町・福山藩領神辺に伝わっていたということは、当時の蝦夷地に関する情報の広がりを考える上で興味深い事例と言える。

一方の「文化元年東日本伊能小図」の写本「従尾張国至蝦夷北極出地度量図」は「針孔を持たない伊能図」ではあるが、伊能忠敬が測量活動を実施中であり、幕府に上呈して数年以内という時期に、地方に非公式なルートで伝わっていたことを示す貴重な事例である。

今回、この両図から幕府系の北方図が製作後数年程度で地方に伝播するという現象が共通してみられることが判明した。

また、この時期の在野の知識人による地図利用や収集目的については、文化初年のロシアとの外交問題を念頭に置きつつも、史料上の制約や事例の不足から検討には限界があった。この点については、今後、より多くの事例を集めた上で検証する必要があり、今後の課題としたい。

冒頭でも述べたように、今年度、国内最大級の古地図コレクションである守

屋壽コレクションが当館に寄贈された。このことを受けて、今後、さらに調査研究や公開・活用を進めていかなくてはならないが、この稀有な資料群が所収する貴重な資料は、菅茶山関係資料など当館所蔵の資料を始め、様々な資料と併せて考察することで、さらに多くの知見をもたらしてくれるものと期待したい。

【付記】

本稿は広島県立歴史博物館平成三〇年度企画展「初公開！　世界を驚かせた日本人の地図づくり」の関連行事として、展示会の主担当であった筆者が行った記念講演会「守屋壽コレクションの文化元年伊能小図について」（同年九月二十二日実施　於広島県立歴史博物館講堂）の発表内容を基に作成した。

【注】

1　平成十年度春の企画展「菅茶山とその世界Ⅱ―黄葉夕陽文庫の概要―」、平成二十四年度夏の企画展「菅茶山と化政文化を彩る七人の巨人たち―菅茶山とその世界Ⅳ―」など。上記展示会の展示図録には「松前えそ図」の図版も掲載されている。

2　「蝸角檮杌」（重要文化財菅茶山関係資料〔指定番号　文書記録類№2〕）。

3　「蝸角檮杌」など茶山が残した日記には、書籍などを貸借した記録が他にも多数見られるが、用字として「貸」・「借」ともに使用されている一方、本件のような「仮」は他には見られず、他の記述の検討からも茶山が「仮」を貸借のどちらの意味で使用したのか判断ができなかった。

4　秋月俊幸『日本北辺の探検と地図の歴史』北海道大学出版会　一九九九年　二四八ページ

5　阿部家文書の中の近藤系の北方図「蝦夷地図」があるが、本図を紹介した二〇一五年の福山城博物館展示会『福山阿部家展　受け継がれた武家資料』の展示図録の解説によれば、幕末の嘉永期に板倉伊予守からもたらされたものと考えられている。

6　重要文化財菅茶山関係資料の地図の中で、同一図が複数所蔵されている例は「松前えそ図」の他には見られない。

7　菅茶山が所蔵した「松前えそ図」には、地図中の九か所にわたり、蝦夷地各所の地勢や地形などの情報が茶山の筆で墨書されている。地図そのものを写したのはおそらく茶山本人ではなく、門下生などではなかったかと推定されるが、墨書は茶山の筆とみてよい。このことは、借りた地図にこれらの情報が書いてあったというのではなく、図を写した後で得た情報を、茶山が記したと考える方が穏当である。これに関連して、東平からの蝦夷図借用期間中の文化五年五月十一日の日記に、「松前人来乞書」という記述があり、注目している。東平自身も蝦夷地への渡航経験はない。

なお、菅茶山は伊能忠敬に蝦夷地についての質問をしていたようで、その回答に当たる書状が菅茶山関係資料中に一点残されているが、「松前えそ図」に記載される情報とは一致せず、伊能忠敬が情報源とも考えにくい。

そのような中で、想像の域を出ないが、この「松前人」に対して、茶山は、あるいは蝦夷地の地図を広げながら、様々な情報を書き留めたのかもしれない。この「松前人」の名前等は不明である。

8　秋岡式次郎氏が、「伊能図　従尾張国至蝦夷地極出地度量図　同図説　文化四年六月澣花井模写」が昭和一〇年代に東京大橋図書館書庫増築記念展覧会に出品されていたことを報告している（秋岡論文　昭和四十二年）。

9　国宝伊能忠敬関係資料　指定目録（地図・絵図編）にはこのような「●●より▲▲に至る～」と記された資料名の地図資料が多い。「自江戸至奥州沿海図」（指定番号

59）などはその典型例である。

なお、当該目録は、次のサイトで公開されている（令和三年八月十日、最終アクセス）https://www.city.katori.lg.jp/sightseeing/museum/kokuho.files/kokuhou-Catalog-01.pdf

10　箱田良助は、「大日本沿海輿地全図」完成目前にして伊能忠敬が亡くなった後、同事業を引き継いで完成にこぎ着けた人物で、榎本家の養子となり晩年は旗本として勘定方に務めるなど、伊能忠敬の門下では出世頭であった。また良介は、幕末維新期の政治家榎本武揚の実父としても知られる。

11　ちなみに、「旧伊能家本」のプランは、地図を描く上で最小限の紙が貼り継がれているのに対し、本図は周囲の余白が「旧伊能家本」よりも少しずつ広く取られている。おそらく図を写し取る上で、原図の各部分に紙を敷いて写したものと推定され、本図が「旧伊能家本」の系統の図であることを示唆するものと考えられる。

12　この点について、平成三十年に伊能忠敬記念館の酒井一輔氏から、一つの可能性として旧伊能家本も、本来は「従尾張国至蝦夷北極出地度量図説」のような別帖が存在していたのかも知れない、との御教示をいただいた。従来、この旧伊能図本に測量データや凡例が書かれていないことについて「控え図のため、序文、凡例、里程表などの記載はない。」（渡辺一郎・鈴木純子『伊能忠敬の地図をよむ　改訂増補版』七二ページ）といった解釈がなされていたが、実際のところ、控え図であるならば、序文や識語はないことも考えられるが、凡例が掲載されていないと地図そのものが理解できないことになり、従来の解釈であれば、この点がうまく説明できない。その意味でも本図の存在は、これまでの「旧伊能家本」の解釈にも見直しを迫るものであると言える。

13　菅茶山も鈴木甘井も、このほかにも地図資料を収集している。近世の知識人と呼ばれる人たちの地図収集については、ほかの博物学的な収集の一環として、彼らのネットワークの中で形成されていったということが上杉和央氏により明らかにされたが、茶山も甘井も、博物学的な関心もあったと考えられ、彼らの地図収集も同じ文脈で捉えられると考えられる。

その上で、彼らが文化年間において今回取り上げたような幕府が関わった北方図を入手したことについては、ロシアを始めとする対外危機的な意識が基底にあったためではないかと筆者は推測している。

【参考文献】

新潟県高田市教育会『高田市史』大正三年
秋岡武次郎「伊能忠敬作成の日本諸地図の現存するものの若干」（『地学雑誌』76巻6号）昭和四十二年
秋月俊幸『日本北辺の探検と地図の歴史』北海道大学出版会　一九九九年
対外関係史総合年表編集委員会『対外関係史総合年表』吉川弘文館　平成十一年
上越市『上越市史』通史編４　近世２　平成十六年
福山城博物館展示図録『箱田良助と榎本武揚』二〇〇九年
渡辺一郎、鈴木純子『図説　伊能忠敬の地図をよむ』改訂増補版　河出書房新社　二〇一〇年
上杉和央『江戸知識人と地図』京都大学出版会　二〇一〇年
杉本史子ほか編『絵図学入門』東京大学出版会　二〇一一年
高木崇世芝『近世日本の北方図研究』北海道出版企画センター　二〇一一年
鈴木純子「伊能図の内容と構成」（『伊能図大全』河出出版　二〇一三年）
福山城博物館展示図録『福山阿部家展―受け継がれた武家資料―』二〇一五年
拙稿「黄葉夕陽文庫「松前えそ図」について」（『広島県立歴史博物館　研究紀要　第

十五号』所収）平成二十五年
広島県立歴史博物館所蔵品目録『広島県立歴史博物館所蔵品目録八　重要文化財「菅茶山関係資料」指定目録』平成二十八年
広島県立歴史博物館蔵『平成三〇年度企画展　守屋壽コレクション追加受託・伊能忠敬没後二〇〇年記念　初公開！　世界を驚かせた日本人の地図づくり―行基図から伊能図まで―』展示図録　平成三〇年

執　筆　者

石川　良枝　　広島県立文書館文書等整理従事員
石橋健太郎　　広島県立歴史博物館学芸課主任学芸員
伊藤　大輔　　広島県教育委員会事務局管理部文化財課主任
岡野　将士　　広島県立歴史博物館学芸課主任学芸員
木村　信幸　　広島県立歴史博物館学芸課長兼草戸千軒町遺跡研究所長
久下　　実　　広島県立歴史博物館学芸課主任学芸員
花本　哲志　　広島県立歴史博物館頼山陽史跡資料館主任学芸員
湯谷　祐三　　愛知県立大学非常勤講師
廣森美枝子　　小牧市古文書調査会会員
尾崎　光伸　　広島県立歴史博物館草戸千軒町遺跡研究所主任学芸員

広　島　県　立　歴　史　博　物　館　　研　究　紀　要　第24号

BULLETIN of the HIROSHIMA PREFECTURAL MUSEUM of HISTORY Vol.24

発　行　日　　令和３年９月 30 日

編集・発行　　広島県立歴史博物館
Hiroshima Prefectural Museum of History
〒720-0067　広島県福山市西町 2-4-1
2-4-1 Nishi-machi Fukuyama City Hiroshima Prefecture
720-0067,Japan
Tel.084-931-2513　Fax.084-931-2514

印　　刷　　株式会社カオス